

女性たちはクイアな時間の夢を見るか？

— Nella Larsen の3人の女性たち

佐々木 真理

I ヒロインの夢

1928年に出版されたNella Larsenの*Quicksand*の最終章において、ヒロインのHelga Craneは、“the oppression, the degradation, that her life had become” (136) から逃れることの絶望的なまでの不可能性に直面し、しばらくの間は未来の計画を立てることを断念しようとする。そして、“about freedom and cities, about clothes and books”といった心地良いことだけを考えよう、夢見ようとしながら、己にこう言い聞かせる。

She must rest. Get strong. Sleep. Then, afterwards, she could work out some arrangement. So she dozed and dreamed in snatches of sleeping and waking, letting time run on. Away. (136)

だが、もちろん、彼女の夢が叶うことはなく、さらに悲惨な未来を予兆する文章で物語は幕を閉じる。人種と性差の抑圧から脱出することのできないHelgaの時間は、彼女が幾度も新しい生活を試みては挫折するという反復性に象徴されるように、同一の軌跡を逸脱することができず、負の円環をたどり続ける。だが、ヘテロセクシュアルな結婚生活を送り、次々と子供たちを生み育てるという人生を最終的に選択したHelgaの家庭内に限定された時間は、実は、19世紀から続く資本主義の発達と共に自明のこととされてきた、いわば未来へとひたすら前進する直線的な国家の時間、大文字の歴史の時間にとって必要な時間だった。Elizabeth Freemanは*Time Binds: Queer Temporalities, Queer Histories*の“Introduction: Queer and Not Now”に

において、南北戦争前のアメリカ合衆国における時間の流れを、私的な“cyclical-domestic time”が公的な“linear-national history”の前進に必要とされたいわば二重の時間であったことを論じているが、Helgaの人生はまさにこの二重の時間に囚われたものであった。

興味深いのは、Larsenが*Quicksand*のわずか一年後に発表した*Passing*においては、二人のヒロインのClareとIreneの時間はHelgaとは異なり、Helgaの二重の時間を分断し逸脱しようとしていることだ。Freemanが論じているように、19世紀終わりから20世紀初頭におけるモダニズムの台頭は、19世紀的な二重の時間に変容をもたらし、“Its signature was interruptive archaisms: flickering signs of other historical moments and possibilities that materialized time as always already wounded” (7) であり、その結果、“Sexual dissidents became figures for and bearers of new corporeal sensations, including those of a certain counterpoint between now and then, and of occasional disruptions to the sped-up and hyperregulated time of industry” (7) となったのである。Judith Butlerを初めとする研究者たちが論じてきたように、IreneとClareの関係にホモセクシュアルな欲望を読み解くことが可能であるならば、Freemanの指摘するモダニズムの時間の変容と“sexual dissidents”との関係は、*Passing*においても大きな要素となっているのではないだろうか。HelgaからClareとIreneへの時間の変質はどのような軌跡を描くのか、あるいは、Helgaの夢はどのようにIreneとClaraに受け継がれていくのか。本稿は、1920年代のHarlemや南部といった地域性、当時のアメリカ社会における人種による社会的区分といった空間的要素を軸に論じられてきたLarsenの二つの小説を、19世紀から20世紀にかけての時間の変容を背景に、いわば時間の概念を軸に読み解こうとする試みである。

II *Quicksand*の時間

*Quicksand*において一つの重要な要素となっているのが“place”であるのは間違いないだろう。Barbara Johnsonが指摘するように、この小説にお

ける人種の問題は、題辞のLangston Hughesの詩の一節が象徴する、“a fine big house”か“a shack”か、NorthかSouthか、あるいはEuropeかAmericaか、といった“the question of *place*” (Johnson 39) に集約される。ヒロインのHelga Craneは、南部のアフリカ系アメリカ人のための教育施設で教師をしていたが、その施設の理念や同僚たちの思想の裏に潜む偽善に耐えられず、母方の伯父を頼ってChicagoへ、それからNew Yorkへと移り住む。そして幾つかの幸運が重なって、“In the actuality of the pleasant present and the delightful vision of an agreeable future she was contented, and happy” (49) とあるように、Harlemでの経済的にも社会的にも恵まれた生活を送るようになる。だが、Helgaの幸せは長くは続かない。美しい春の兆しの訪れにもかかわらず、彼女は“restlessness”を感じるようになってしまうのだ。

Somewhere, within her, in a deep recess, crouched discontent. She began to lose confidence in the fullness of her life, the glow began to fade from her conception of it. As the days multiplied, *her need of something, something vaguely familiar*; but which she could not put a name to and hold for definite examination, became almost intolerable. (50; italics mine)

結局、Helgaは伯父が送ってくれたお金を元に、亡くなった母の故郷Denmarkへと旅立つ。母方の親戚たちの歓待を受けたHelgaは、再び“*She liked it, this new life. For a time it blotted from her mind all else*” (69) とあるように新しい生活に満足するものの、やはりその幸せはすぐに色褪せ、“*Well into Helga’s second year in Denmark, came an indefinite discontent*” (83) と心に満たされないものを感じるようになる。そして、New Yorkに再び戻ったHelgaは、さらにもう一度新しい人生を夢見て、再度南部へと旅立つことになるのだ。

Helgaの新しく人生をやり直そうという試みが常に地理的な移動を伴うのは、彼女の生物学的な出自を象徴するものだ。デンマーク人の母とアフリカ系アメリカ人の父の間に生まれたHelgaは、常に二つの人種の間で引

き裂かれ、自らのルーツを求めるかのように、アメリカとヨーロッパを、そして南部と北部を往復するのである。混血であること、そして外見はアフリカ系アメリカ人であることがHelgaの自己の分裂と絶え間ない不満へとつながっているとして、20世紀初頭の南部から北部へのアフリカ系アメリカ人の大移動がもたらしたいわゆる“passing”の増加と、1920年代のHarlem Renaissanceに象徴されるアフリカ系アメリカ人たちの社会的地位の変動を背景に*Quicksand*はこれまで考察されてきた¹。しかしながら、Helgaがその都度、いつも同じような不安と落ち着きのなさ、どこか見覚えのある“something vaguely familiar”に掻き乱される点に着目するならば、地理的な移動という空間的な問題に加え、Helgaの負の反復に表象される円環的な時間の問題を見逃してはならないだろう。

Helgaはなぜ同じような過ちを、あるいは幸せから不満へそして新たな人生を求めるという行為を場所が変わっても繰り返してしまうのだろうか。彼女自身、そのことをよく自覚しており、以下のように悩んでいる。

Frankly the question came to this: what was the matter with her? Was there, without her knowing it, *some peculiar lack in her?* . . . Why couldn't she be happy, content, somewhere? Other people managed, somehow, to be. To put it plainly, didn't she know how? Was she incapable of it? (83; italics mine)

ここで注目すべきは、彼女が怖れる自分の中の“some peculiar lack in her”が、異性愛の不可能性という問いと共に現れているということだ。例えば、HelgaにDenmarkでの生活への不満を募らせたのは、ある日届いた、Anne GreyがDr. Robert Andersonと結婚するという手紙だった。その知らせは、“It added, somehow, to her discontent, and to her growing dissatisfaction with her peacock's life” (83) とあるようにHelgaを悩ませることになる。そもそも、物語の最初からHelgaの人生の節目において大きく関わり続けるのが、Dr. Andersonなのである。Helgaが勤務していた教育施設の校長であった彼は、

辞職したいというHelgaを引き留めようとして逆にHelgaを怒らせ、教師を辞めて新しい生活を始めようと彼女に決意させてしまうのだ。興味深いことに、Helga自身、なぜ彼の言葉がそれほどまでに自分を怒らせたのかよくわかっていない。だが、次のHelgaのモノローグから明らかなように、HelgaはDr. Andersonに否応なく心を惹かれている。

Just what had happened to her there in that cool dim room under the quizzical gaze of those piercing gray eyes? . . . And why had she permitted herself to be jolted into a rage so fierce, so illogical, so disastrous, that now after it was spent she sat despondent, sunk in shameful contrition? . . . She didn't, she told herself, after all, like this Dr. Anderson. He was too controlled, too sure of himself and others. (25)

HelgaがNew Yorkでの生活と決別しDenmarkへ行くことを決心するきっかけとなったのも、Dr. Andersonとの再会であった。この時もHelgaはDr. Andersonに対し“that vague feeling of yearning, that longing for sympathy and understanding which his presence evoked” (53) を感じつつも、同時に、“a sharp stinging sensation and a recurrence of that anger and defiant desire to hurt” (53) に襲われるのだ。

Helgaの説明のつかない欲望に満ちた怒りは、Dr. Andersonが自分の性的魅力に惹かれているということに対してのものなのか、それとも、自らのアフリカ系アメリカ人の女性としての性的魅力そのものに対してなのか、あるいは、Dr. Andersonという異性に惹かれた自分に対するものだろうか。そもそもなぜHelgaは異性愛の成就の可能性が行く手に現れるとその手前でいつも立ちすくむのだろうか。これらの問いには、もしHelgaにはホモセクシュアルな欲望が存在するただけ仮定するならば、説明のつかない部分が残ることに注目したい。もちろん、テキストに表象されるHelgaの欲望は異性愛という言葉だけでは表現できない多面的な要素を持つことは否定できない。だが、重要なのは、Helgaの怒りと欲望が、異性愛と人種の

問題、特に、アメリカ合衆国の奴隷制度の歴史の中で、アフリカ系アメリカ人の女性に刻印されてきた過剰なセクシュアリティが複雑に交錯する中で描かれているということなのだ。実際、Denmarkで知り合った芸術家のAxel Olsenが惹かれているのは、アフリカ系の女性としての外見を持つHelgaでしかなかった。いわば、セクシュアリティと人種の問題が絡み合う*Quicksand*において、Helgaの欲望と表裏一体となった怒りは、人種と異性愛がダブル・バインドとなって形成する規範に対するものとも言えるのではないか。その規範に囚われたHelgaの姿が最も前景化されるのは、ある日、友人たちと出かけたキャバレーでDr. AndersonとAudrey Denneyが踊っているのをHelgaが見つめる場面だろう。“Almost like an alabaster”のような肌と“softly curving mouth”に“black smears” (62) のような瞳を持つAudreyは、Helgaの親友のAnne Greyには“Because she goes about with white people. . . and they know she’s colored” (62) と嫌悪されている。なぜそれが悪いことなのかと問いかけるHelgaに対し、Anneは“the white men dance with the colored women. Now you know, Helga Crane, that can mean only one thing” (63) と答える。アフリカ系アメリカ人の地位向上と権利獲得のためにさまざまな活動を行っているAnneのこの言葉は、人種問題と複雑に交差する性差とセクシュアリティの問題を浮き彫りにするものだ。それと同時に、この場面ではHelgaのDr. Andersonに対する欲望に満ちた怒りが、以下の描写を通して分節化されることになる。

At the next first sound of music Dr. Anderson rose. Languidly the girl followed his movement, a faint smile parting her sorrowful lips at some remark he made. Her long, slender body swayed with an eager pulsing motion. She danced with grace and abandon, gravely, yet with obvious pleasure, her legs, her hips, her back, all swaying gently, swung by that wild music from the heart of the jungle. Helga turned her glance to Dr. Anderson. Her disinterested curiosity passed. While she still felt for the girl envious admiration, that feeling was now augmented by another, *a more primitive*

emotion. She forgot the garish crowded room. She forgot her friends. She saw only two figures, closely clinging. (63-64; italics mine)

ここで重要なのは、Helgaを揺り動かす“a more primitive emotion”は、Dr. AndersonではなくAudreyに対する“envious admiration”とつながっているということだ。さらに、HelgaのAudreyに対する思いが、“what she felt for the beautiful, calm, cool girl who had the assurance, the courage, so placidly to ignore racial barriers and give her attention to people, was not contempt, but envious admiration” (63) であるのを見ると、HelgaがAudreyを見つめる視線にはホモセクシュアルな要素が介在するのと同時に、人種の区分を明確化する規範を自由に逸脱しているAudreyへの羨望も含まれていることもわかるだろう。

この意味で、HelgaがDr. Andersonに対する欲望を肯定するのが、彼が結婚した後であることも納得がいく。いわば、Dr. Andersonは結婚することで、Helgaが彼と関係を持ったとしても、結婚という異性愛の一つの成就の形にそのまま結びつく怖れはないからだ。ある日、パーティーで再会した二人は、

... she never quite knew exactly just how, into the arms of Robert Anderson.
... And then it happened. He stooped and kissed her, a long kiss, holding her close. She fought against him with all her might. Then, strangely, all power seemed to ebb away, and a long-hidden, half-understood desire welled up in her with the suddenness of a dream. ... Sudden anger seized her. (105)

と初めて互いに触れ合う。Helgaは初めて“a long-hidden, half-understood desire”に身をゆだねながらも、やはり怒りを抑えることができない。それでも、ここでHelgaがDr. Andersonに対する欲望を自分に認めた背景には、Dr. Andersonが既婚者であるということが一つの大きな原因であったと言えるだろう。その後、HelgaはDr. Andersonと関係を持つことを決意

するが、Dr. Andersonは結局は“no matter what the intensity of his feelings or desires might be, he was not the sort of man who would for any reason give up one particle of his own good opinion of himself” (109) であり、婚外の関係を女性と持つという、規範を逸脱するような行為に挑む気持ちがないことを知らされるのである。ここでDr. Andersonの振る舞いを通して明らかになるのは、Helgaが生きるアフリカ系アメリカ人社会の人種的・性的規範には倫理的な要素も大きく関わっているということだろう。“For Helga Crane wasn’t, after all, a rebel from society, Negro society. It did mean something to her. She had no wish to stand alone” (108) という一節に明らかなように、Helgaは当時の人種的・性的・倫理的規範から逃れることの不可能性を改めて認識させられるのであった。

だが、デンマーク人とアフリカ系アメリカ人の混血であることによって、Helgaの存在そのものが当時のアメリカ合衆国における人種の規範の境界線を曖昧なものとし、ヘテロセクシュアルな欲望に嫌悪と怒りを感じる彼女の欲望の複雑さそのものが、異性愛という規範を転覆させる可能性をはらむため、常にHelgaは“something vaguely familiar”な不安につきまといられることになる。この意味で、Helgaが再びそして最後に試みる人生のやり直しが、牧師夫人として南部での生活を始めることであるのは極めて示唆的である。それはまるであたかも、規範から逸脱することに自らの不幸の原因を見出し、人種と異性愛の規範に則した生き方を選ぶことで幸せを手に入れようとする行為のようだ。敬虔なキリスト教徒として夫に忠実につくし、教区の人々のために懸命に働き、次々と子供を産むことによって、Helgaは“now, at last, she had found a place for herself, that she was really living” (119) と最初は感じる。だが、“If she remembered that she had had *something like this feeling before*, she put the unwelcome memory from her with the thought: ‘This time I know I’m right. This time it will last’ (119; *italics mine*)” という一節が予感させるように、Helgaの幸せはすぐに色褪せてしまう。人種と異性愛という二重の規範に従ったとしても、以前と同じ不満と落ち着きのなさに襲われるという事実は、Helgaの幸福が規範を越えたところに存在す

ることを示唆しているのだ。

結局、異性愛の規範に従い次々と子供を産んだHelgaは、繰り返される妊娠と出産と子育てに肉体的にも精神的にも消耗していくのである。そして、四番目の子供を出産するときには生死の境をさまようこととなり、ようやく自らの過ちに気が付く。だが、今度はHelgaはもう一度人生をやり直すことはできなかった。“And hardly had she left her bed and become able to walk again without pain, hardly had the children returned from the homes of the neighbors, when she began to have her fifth child” (136) という最後の文章は、Helgaの絶望的な未来を暗示する。人種的にも性的にも規範に則して、Freemanが述べる、“cyclical-domestic time”と“linear-national history”という二重の時間に沿って生きようとしたHelgaの打ちのめされた姿は、いわば二重の規範に従うことの耐えがたさの象徴なのである。Helgaが夢見る幸福は、Helgaが生きようとした時間の中では実現されえないが、Helgaは二重の規範の流砂の外へ脱出することもできないのである。

Judith Butlerの、Nella Larsenに関する卓越した分析の何よりの功績は、Larsenの作品を分析するときに、人種か性差かという二つの要素のどちらかに比重をあてて論じるべきではなく、両要素の関連性に注意を払うべきだと指摘した点だろう²。Butlerはそこで、性差をより根源的なものとして、あるいは性差の問題が人種問題の根本に複雑に絡んでいることを解明しているが、流砂から逃れることのできないHelgaの姿が提示するのは、むしろ二つの規範がHelgaにとっては等価のダブル・バインドとなって、彼女を大文字の歴史という時間の流れの中に捕えているということなのである。

Ⅲ 記憶と忘却

*Quicksand*のわずか一年後に発表された*Passing*においては、人種と異性愛の二重の規範に囚われるHelgaのような女性のあり方が、今度はClareとIreneという二人のヒロインを通して描かれることになる。白人とアフリカ

系アメリカ人の混血でありながら白人として“pass”しているClareは、人種の区分の不可視性を身体化することで、Helgaが抜け出せなかった人種の規範を前景化しつつも、*Quicksand*のAudreyのようにしなやかにその規範を逸脱して生きている。一方でIreneは、人種と異性愛の規範に従おうとするHelgaの生真面目さを受け継ぎ、アフリカ系アメリカ人のコミュニティに忠実に暮らし中産階級的な安定した暮らしを営んでいる。性的にも人種的にも境界を自由に越境しIreneの規範に則した生活を脅かそうとするClareと、そのClareに対して怯えと怒りと魅力を感じるIreneとの複雑な関係性に注目し、その軌跡にホモセクシュアルな欲望を読み解くButlerに代表されるように、*Passing*は*Quicksand*における人種の問題に性の問題が加わった作品として解釈されてきた。だが、前述した人種と異性愛の二重の規範に囚われるHelgaの姿に明らかなように、この問いは*Quicksand*において既に浮上していたのである。この意味で、*Quicksand*のHelgaとは正反対のClareを登場させ、IreneとClareという対照的な二人の女性を描くことで、*Passing*はどのように*Quicksand*で提示された問題を継承しているのか考える必要があるだろう。

そもそも*Passing*の作品構造は、Helgaの人生をクロノロジカルにたどっていく*Quicksand*のように進行するわけではない。Part One (“Encounter”)の冒頭はIrene Redfieldが一通の手紙を受け取るところから始まる。その手紙には差出人の名前が書かれていなかったにもかかわらず、Ireneはすぐにそれが誰からの手紙なのかを察する。なぜなら、“Some two years ago she had one very like it in outward appearance” (9) だからだ。そしてIreneが少女時代のClare Kendryを回想する場面が変わり、Clareの不幸な過去と複雑な性格がIreneの視点から語られる。その後、場面は、“Irene brought her thoughts back to the present, to the letter from Clare Kendry that she still held unopened in her hand” (11) と現在へと戻る。Clareからの二度目の手紙を読み始めたIreneは、“it’s your fault, ’Rene dear. At least partly. For I wouldn’t now, perhaps, have this terrible, this wild desire if I hadn’t seen you that time in Chicago” (11) という一節に、二年前のChicagoでの“a clear, sharp remembrance”を

“humiliation, resentment, and rage” (11) の混じり合った思いと共に思い出す。そして、“This is what Irene Redfield remembered” (12) という文章から始まって、二年前のChicagoでの二人の再会が語られていくのである。その後、ChicagoからNew Yorkへと帰る列車の中で、IreneがClareからの最初の手紙を読む場面でPart Oneは幕を閉じる。そして、Part Two (“Re-Encounter”) の冒頭では、“Such were Irene Redfield’s memories as she sat there in her room, . . . holding that second letter of Clare Kendry’s” (51) と、再びPart Oneの初めでIreneがClareからの二番目の手紙を受け取った現在の時間へと戻るのである。

フラッシュバックによって語られる過去と現在の交錯によって前景化されるのは、記憶と忘却の奇妙なメカニズムである。Part Oneの最後の場面でClareからの最初の手紙を細かくちぎり捨てたIreneは、“The chances were one in a million that she would ever again lay eyes on Clare Kendry. . . . She dropped Clare out of her mind and turned her thoughts to her own affairs” (47) とClareのことをすっかり忘れ去ろうと決意する。Part Oneの冒頭で突然手紙を受け取り驚くIreneの姿から、おそらく彼女が二年前の出来事を忘れるのに成功し、あるいは心の底に仕舞い込み普段は思い出すことはなかったことがうかがえる。実際、Chicagoでの再会から二度目の手紙までの二年間について、彼女がどのような生活を送ってきたのか、どのような思いをしたのかについてはほとんど作品中には記述がないのだ。だが、だからこそ、Part TwoでChicagoでの不愉快な再会を思い出したIreneがその記憶の鮮明さと記憶が喚起する感情の激しさに驚く姿は、二年前の出来事の強烈な印象を表現することができるのである。いわばこの場面が明確にするのは、忘却の深さによって際立たせられる記憶の執拗さだと言い換えることができるだろう。

記憶と忘却の対比は、二年前、ChicagoでIreneとClareが再会した場面においても見出すことができる。二年前の暑い夏の日、Chicagoを訪れたIreneは白人として“pass”して入ったホテルで、一人の美しい魅力的な女性と出会う。それがClareだったが、Clareの方はすぐにIreneに気がついた

のに対し、IreneはなかなかClareに気がつかず、Clareに話かけられた後も彼女のことを思い出すことができない。Ireneの記憶の喪失は、“passing”していることへの不安と恐怖と、Clareの持つ不思議な魅力にひかれる気持ちとが交錯する中で、奇妙なほど長く引き伸ばされるのである。“Very slowly she looked around, and into the dark eyes of the woman in the green frock at the next table” (15) と、Clareが自分を見つめていることに気がついたIreneは、まず、自分の外見におかしなところがあるのではないかと化粧や服を確認する。その次に、“Did that woman, could that woman, somehow know that here before her very eyes on the roof of the Drayton sat a Negro?” (16) と、その場だけ便宜的に白人として振る舞っていることに気が付かれたのではないかと不安になるのである。ここでは、Ireneの過剰な自意識の影にあるホモセクシュアルな欲望がまず先に表現され、その後で人種差別に対する意識が表現される。さらに、IreneはClareに直接話しかけられた後も彼女のことを思い出すことができない。“In the brief second before her answer, Irene tried vainly to recall where and when this woman could have known her. . . . The woman before her didn’t fit her memory of any of them” (17) とどうしても思い出せないIreneはそのような自分を恥ずかしくさえ思う。そして、Clareの笑い声を聞いたときに初めて、ようやく“the trick which her memory had played her” (17) が解け、IreneはClareのことを思い出すのである。

不自然なまでに引き伸ばされる、IreneがClareを思い出すまでのくぐりや、もちろん、二人が再会した場所が本来なら白人専用のホテルであることから、Clareが白人として完全に“pass”していることを強調するものである。Ireneは、そのような場所で、自分と同じ人種の女性に、しかも昔の友人に出会うとは思ってもいなかったからこそ、“Why, Clare, you’re the last person in the world I’d have expected to run into” (20) と思わず口走るのである。だが、“I’ve thought of you often and often, while you—I’ll wager you’ve never given me a thought” (20) とClareに責められると、Ireneは自分に言い聞かせるようにこう思う。

No, Irene hadn't thought of Clare Kendry. Her own life had been too crowded. So, she supposed, had the lives of other people. She defended her—their—*forgetfulness*. (20; italics mine)

この場面でキーワードとなっているのも“forgetfulness”——すなわち、忘却なのである。

いったんClareの記憶が蘇ると、IreneはClareが父親の不幸な死の後遠い親戚に引き取られたこと、しばらくは行き来があったもののClareの素行に関する悪い噂が広まったこと、やがてClareからの音信がとだえたこと、Clareの父親と親交のあった自分の父親がClareを訪ねていったことを鮮明に思い出す。あたかも会わずにいた十二年間という歳月がなかったかのよう、IreneのClareに関する記憶と、記憶が喚起する感情は鮮烈なものとして描かれ、Ireneの忘却の深さと記憶の鮮明さが対照的であればあるほど、Clareの記憶がIreneの心に執拗につきまとっていたことが、心の底に隠されていたことが明らかになるのである。実際、“There was no mistaking the friendliness of that smile or resisting its charm. Instantly she surrendered to it and smiled too” (17) とあるように、Clareの魅力に敏感でありその魅力に惹きつけられずにはいられないIreneが、

Catlike. Certainly that was the word which best described Clare Kendry, if any single word could describe her. Sometimes she was hard and apparently without feeling at all; sometimes she was affectionate and rashly impulsive. And there was about her an amazing soft malice, hidden well away until provoked. (10)

と、Clareの性格を的確に分析しているIreneが、Clareのことをまったくの忘却の淵へと沈めてしまうことがありえるのだろうか。

いわば、現在と交錯するIreneの過去の記憶を通して、我々はある記憶を忘却することが本当に可能なのか、あるいはあらゆる記憶は常に既に執拗

に現存し、我々が過去から逃れることは、過去を消し去ることは不可能ではないのか、という問いを突き付けられるのである。そしてこの問いが再度強烈な形で提示されるのが、最後のClareの転落死の場面なのだ。Harlemの友人宅のパーティーに招かれていたIreneたちの元へ、それまでClareのことを白人だと信じていた夫のJohn Bellewが飛び込んでくる。窓の側に立っているClareに詰め寄ろうとするJohnと同時に、Clareの顔に浮かぶいつもの微笑を見てかとなったIreneがClareの側に駆け寄り、そして次の瞬間、Clareの姿が窓の外へと消え失せたとき、“What happened next, Irene Redfield never afterwards allowed herself to remember. Never clearly” (111) という一文が挿入される。ここでは、IreneがClareの悲惨な死に方を思い出すことを決して自らに許さないということ、あるいは、より正確に言うならば、忘却しようと試みるだろうことが示されるのだ。Clareの微笑を見たIreneが、“She ran across the room, her terror tinged with ferocity, and laid a hand on Clare’s bare arm. One thought possessed her. She couldn’t have Clare Kendry cast aside by Bellew” (111) とClareに駆け寄った勢いと怒りの激しさを考えるとき、IreneがClareを突き落したという可能性はかなり高い。Ireneは夫のBrianとClareの関係を疑っており、Clareを自分の安定した生活をおびやかす存在としてみなしていた。Ireneの嫉妬の裏には、Clareが自分には不可能な柔軟さで何の不安も疑念も覚えずに人種の境界を越境していることへの怒りと、さらには抵抗しがたい美しさと魅力で自分の中に潜むホモセクシュアルな欲望を掻き立てることへの怖れもあったのだろう。とはいえ、もちろん、IreneにClareを殺害しようとするまでの意図はなかったのかもしれない、あるいは本当に単なる偶然が重なって、不運にもClareは窓の外へと落ちてしまったのかもしれない。あるいは、白人として白人男性の妻になることで手に入れた裕福な生活が壊れようとしているのを悟って、Clareが自ら死を選んだという可能性も当然残されている。ClareがIreneへの手紙で“You can’t know how in this pale life of mine I am all the time seeing the bright pictures of that other that I once thought I was glad to be free of” (11) と訴えているように、生まれ育ったアフリカ系アメリカ人のコミュニティへの愛着を捨て

切れないClareの姿からは、Ireneが想像するよりClareがはるかに脆い存在であることが読みとれるからだ。だが、全ては曖昧なまま、Ireneの決して思い出してはいけないという決意が示されることで、Ireneの視点から語られるこの小説内においては、本当は何が起こったのかという真実はわからないままとなる。

ここで重要なのは、Ireneは果たして本当に“remember”しないでいられるのか、ということだ。前述したように、Clareの死の謎はさまざまな可能性をはらみ、特にIreneによる殺害という可能性は、怒りと欲望と嫉妬が交差するIreneの複雑な胸中を考えるならばかなり高い。言い換えるならば、ここでは実際にIreneがClareを窓の外へと突き落したかどうかが問題なのではなく、突き落そうとする殺意を持ったかどうかの方が重要となる。強い殺意を抱いた瞬間の記憶を、Ireneは忘却することができるのだろうか。しかも実際に殺意を抱いた直後に、Clareが命を落としたのであれば、その瞬間はさらに強烈な印象を残すはずだ。実は、常にそして既にその瞬間の記憶はIreneの中に現存しているのではないか。その証拠に、Ireneは“If only she could be as free of mental as she was of bodily vigour; could only put from her memory the vision of her hand on Clare’s arm!” (112) と、Clareの腕に置いた自分自身の手のヴィジョンを記憶から消し去ることができないと直後に告白しているのである。“remember”に対する抵抗と抑圧が強ければ強いほどIreneの試みが絶望的であること、その記憶が必ずいつの日か圧倒的な強度を持って回帰するであろうことを予感させる。最後のClareの腕の感触がIreneの手に永遠に残るだろうこと、たとえ日常の営みの中で忘れ去られたと思う時があったとしても、その感触の記憶が、Clareの死の記憶が、いつの日か強烈な形でIreneを再訪するであろうことは疑いない。記憶は差出人不明の一通の手紙のように、突然話しかける見知らぬ女性のように、ある日突然Ireneの前に姿を現すのだろう。

IV クイアな夢

*Passing*において残酷な形で示される忘却の不可能性は、我々に改めて時間の性質と意義を考えさせる。南北戦争前のアメリカ社会における、家庭という私的な領域で営まれた生から再生産そして死へと円環する時間と、過去から未来へと続く直線的な国家の時間という二重の時間に変質していったのは、冒頭で述べたように、19世紀終わりから20世紀にかけてのモダニズムの台頭と重なる時期であった。まさにその時期は、Freudの提唱する精神分析理論が人々の思想に大きな影響を与え始めた時期でもある。Anne Whiteheadが端的にまとめているように、Freudの理論においては、過去は決して死ぬことはなく、常に人につきまとい離れることはない (88-101)。もし精神分析の目的が過去のトラウマから人を解き放つことであるとするならば、精神分析は最初から不可能な目標を目指す試みにすぎない、なぜならば人は過去から逃れることはできないのだから (Whitehead 94-5)。過去のどのような記憶も完全に忘却することが不可能であるならば、常にそして既に記憶は回帰するものであるならば、人はいつの日か記憶の重荷に打ちのめされるのではないか。例えば、“and it’s your fault, ’Rene dear. At least partly. For I wouldn’t now, perhaps, have this terrible, this wild desire if I hadn’t seen you that time” (11) とClareに訴えられたIreneのように、自分の行為がそれと知らずに誰かに影響を与え、それが思いがけない結果となって“it’s your fault”とある日突然非難されるように。

だが、そのような過去のとらえ方は同時に、Whiteheadが述べる、それまでにない新たな可能性をはらむものでもある (153-57)。つまり、直線的な国家の時間がより良き未来を目指して前進するイデオロギーの背後に行ってきたさまざまな負の記憶を忘却から救い出し、過去を再考する契機ともなるからだ。いわば、忘却してはいけない過去との共存を目指すことで、19世紀末に芽生えた新しい時間の概念は、苦痛に満ちたものであると同時に、過去と勇敢に対峙するという倫理性をはらみ、従って新たなる未来の可能性を開くものでもあるのである。

この意味で、*Quicksand*の時間から*Passing*への時間の変容の意義は大きい。Helgaは二重の時間を否定することはできずそこから逃れることはできなかったが、Clareの死はIreneの二重の時間を分断し、異なる軌跡へと導こうとする。おそらく、IreneはHelgaと違い、心地良いものを夢見ることにはありえないだろう。夢では“everything was dark” (114) であるか、あるいはClareの腕の瞬間的な感触という悪夢でしかありえないだろう。だが、IreneとClareのホモセクシュアルな関係を通して提示される過去の忘却の不可能性は、Freemanが“Sexual dissidents became figures for and bearers of new corporeal sensations, including those of a certain counterpoint between now and then, and of occasional disruptions to the sped-up and hyperregulated time of industry” (7) と述べる時間へとつながるのではないか。そしてそれは、Judith Halberstam が“queer time”と“queer space”の可能性を探る著書の中で、

Queer uses of time and space develop, at least in part, in opposition to the institutions of family, heterosexuality, and reproduction. They also develop according to other logics of location, movement, and identification. If we try to think about queerness as an outcome of strange temporalities, imaginative life schedules, and eccentric economic practices, we detach queerness from sexual identity. . . (1)

と述べる、家族や異性愛や再生産といった時間とは異なる、クイアな時間へとつながるのではないだろうか。互いに惹かれあうIreneとClareという二人の女性が、人種と性的規範に囚われる社会で結びあう可能性はなかったとしても、残酷な死の記憶は残酷であればあるだけより苦痛と甘美さを伴って、常に既にそこに現存する。窓の外側へ転落したClareと窓の内側にとどまったIreneの記憶は、手と腕の肉体的な感触を通して、クイアな時間に向かって開いているのである。

Nella Larsenは、*Passing*の出版後、個人的にも作家としても困難な時期を体験することとなった。そして、1930年代の終わり頃までには執筆活動か

ら完全に身を引き、世間からは忘れられた存在となって1964年にひっそりとこの世を去る。だが、その後の1970年代以降のLarsenに対する評価の高まりを見ると、Larsenの存在そのものが記憶と忘却のあり方を問い直すことの意義を教えてくれているかのようだ。Larsenは書くことを辞めてからは亡くなるまで看護婦として働き、二度と筆を執ることはなかった。マンハッタンの一隅で静かに息を引き取ったとき、彼女の脳裏をよぎったのはどのような夢であったのだろう。それは、IreneやClareと同じく、クイアな夢であったのかもしれない。

註

- 1 Carby, Davis, McDowellがそれぞれこの問題について詳しく論じている。
- 2 *Bodies That Matter* 167-185を参照。

Works Cited

- Butler, Judith. *Bodies That Matter: On the Discursive Limits of "Sex."* New York: Routledge, 1993.
- Carby, Hazel V. *Reconstructing Womanhood: The Emergence of the Afro-American Woman Novelist.* Oxford: Oxford UP, 1987.
- Davis, Thadious M. *Nella Larsen, Novelist of the Harlem Renaissance: A Woman's Life Unveiled.* Baton Rouge: Louisiana State UP, 1994.
- Freeman, Elizabeth. *Time Binds: Queer Temporalities, Queer Histories.* Durham: Duke UP, 2010.
- Halberstam, Judith. *In a Queer Time and Place: Transgender Bodies, Subcultural Lives.* New York: New York UP, 2005.
- Johnson, Barbara. *The Feminist Difference: Literature, Psychoanalysis, Race and Gender.* Cambridge, MA: Harvard UP, 1998.
- Larsen, Nella. *Passing.* 1929. Ed and with an Introduction and notes by Thadious M. Davis. New York: Penguin, 2003.
- . *Quicksand.* 1928. Ed and with an Introduction and notes by Thadious M. Davis. New

York: Penguin, 2002.

McDowell, Deborah E. “*The Changing Same*”: *Black Women’s Literature, Criticism, and Theory*. Bloomington: Indiana UP, 1995.

Whitehead, Anne. *Memory*. New York: Routledge, 2009.

